

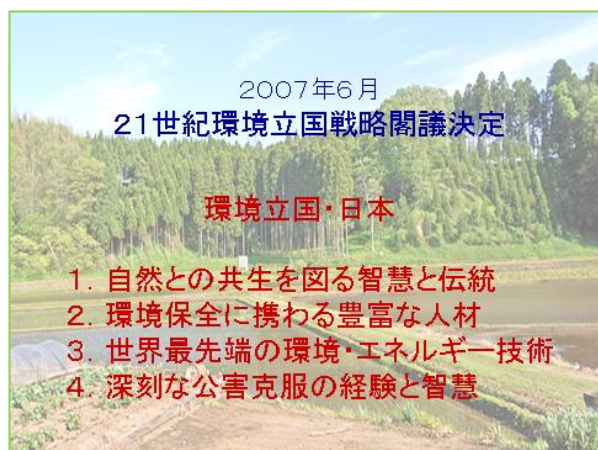
知事ごあいさつ

日時：平成20年5月18日（日）

場所：東京情報大学（千葉市）

1 21世紀環境立国戦略

今、里山・里海は、大きな脚光を浴びています。

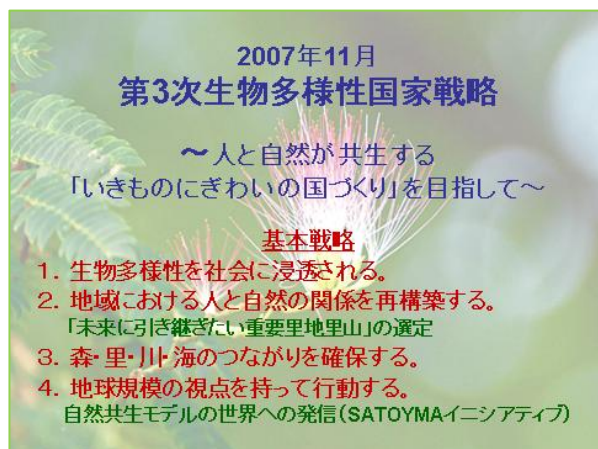


最初のきっかけは、2007年6月の「21世紀環境立国戦略」の閣議決定です。

持続可能な社会を実現するため、日本の強みである「自然共生の智慧や伝統」を活用することを世界に向けて提唱しています。

2 第三次生物多様性国家戦略

2007年11月の第三次生物多様性国家戦略



略でも日本らしさ、アジアらしさの発信が盛り込まれています。

4つの基本戦略がありますが、私は、特に、2の「地域における人と自然の関係を再構築する。」では未来に引き継ぎたい里地里山の選定と、

4の「地球規模の視点を持って行動する。」では自然共生モデルの世界への発信（里山イニシアチブ）が重要だと考えています。



チブ）が重要だと考えています。

3 COP10

更に、2010年に開催される生物多様性条約締約国会議、COP10に向けて、日本が中心となって、アジアの国々に呼びかけ、「里山イニシアチブ」を提唱しようとしています。その内容は、「伝統的な智慧」に「現代の知識・技術」を加え、「新たな共同体」によ



る循環・持続可能・生物多様性をコンセプトとした「自然共生社会」を創ろうというものです。

4 里山とは

そもそも里山とは何なのか。皆さんの考えていらっしゃる“里山”とはどのようなものでしょう？千葉の里山とほかの県の里山は同じなのでしょうか。

「里山」と言う言葉

- 1661年 **里山方**（里山の土地、山方、蔵入）
佐賀藩「山方ニ付テ申渡条々」
（佐賀県林業史編さん委員会,1990）
- 1663年 **里山廻**（里山の巡回役、山廻役、奥山廻役）
加賀藩「改作所旧記」（山口隆治,2003）
- 1713年 **里山**（深山、里山、野場）
秋田藩「林取立役定書」（筒井迪夫,1984）
- 1759年 **里山**（集落近くの山）
名古屋藩「木曾御材木方」（岡利幸,2004）

私は、ついこの間まで「里山」という言葉は、昭和30年代後半に京都大学出身の四手井綱英さんが言い出したものだと思っていた。

ところが、江戸時代の古文書を見ると、既に「里山」という言葉が出ています。

「里山方」とか「奥山」という言葉も出てきます。古くから集落と一体となった里山と、集落の外にある奥山という概念が出来上がっていたようです。写真を見てください。これは、山武市の里山です。

山武林業 背戸山

屋敷林→農用林→林業



次は畑を背負った平地林で、木はスギで、200年くらいのものだそうです。

山武林業 平地の巨木林

上木: スギ 180年から240年
下木: ヒノキ 70年



次の写真を見てください。佐倉市の地元のNPOが、荒れていた落葉広葉樹林を復元したのだそうです。



更に次の写真は、同じNPOが、谷津田に水が満遍なく行き渡るように管理しているところです。

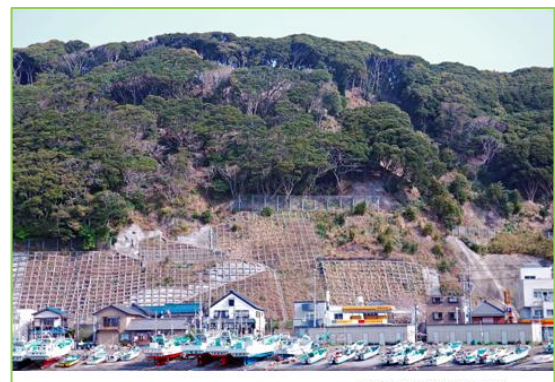
里山林もそれぞれ特徴がありますね。

次の写真は、鴨川市のマテバシイ林です。常緑広葉樹のうっそうとした森林ですが、この木は人が植えたものだそうです。つまりこれも里山だったと言っているのでしょうか。



以前は、薪炭として利用されたり、海苔の養殖に利用されていたのが、使われなくなって、伐採されなくなり、伸び放題に伸びてしまったため、林内は真っ暗で、草も生えなくなっていました。その結果が次の写真です。

林内が裸地化したため、土砂が落ちてくるようになり、その結果、下の人家を守るため、大規模な工事が必要になってしまいました。



里山として利用されず、人の手が入らなくなったため、大きな影響を及ぼしているのです。

これは、竹林がどんどん拡大している様子です。この竹がなければ、美しい里山風景ですよね。



5 里山の価値

里山の価値というのは何なのでしょう。里山は、人が入って豊かになった自然環境です。人々は山菜を採り、道を付け、下草を刈り、竹を伐採して維持管理してきました。



千葉県の特長はいろいろあります。例えば標高が低いし、北と南で木の種類がまったく違ったりしています。



また、特に北総地域を中心に、谷津という谷地形が毛細血管のように張り巡らされており、その奥からは水が湧き出すことが多く、谷津田と呼ばれる水田として利用されてきました。

谷津田は、東京や神奈川で見られる「谷戸田」と違い、谷奥まできわめて標高差が小さいのが特徴です。

写真は、私が昨年千葉市の大藪池谷津を見学に行ったときの写真です。



大釜、子釜という地下水が吹き出る場所がありました。



里山の森は、いろいろな人がいろいろな利用と維持管理をするので、モザイク模様になっています。スギの大きな木があったり、桜が咲いていたり、竹林があったり、水田や畑や集落が点在しています。その結果、全体的に見ると、生物にとっても住み心地の良い環境を作り出しているのです。



6 里山の危機

皆さんもそう思いいらっしゃると思うのですが、今、里山は危機を迎えています。

それは、人が入らないという危機です。燃料革命により炭や薪が使われなくなりました。山菜など食料を採っていたのが、スーパーで手に入るようになってしまいました。人が手を入れなくなって、里山は荒れ始めています。

この放置竹林の写真もその典型です。



次は、間伐の手遅れ林分です。真っ暗になって草がほとんど生えていません。



この写真をご覧ください。私が、千葉の中で最も生物多様性に影響があると考えている大面積な砂利採取場です。私たちは、これをグランドキャニオンと呼んでいます。





山砂採取(君津市市宿)

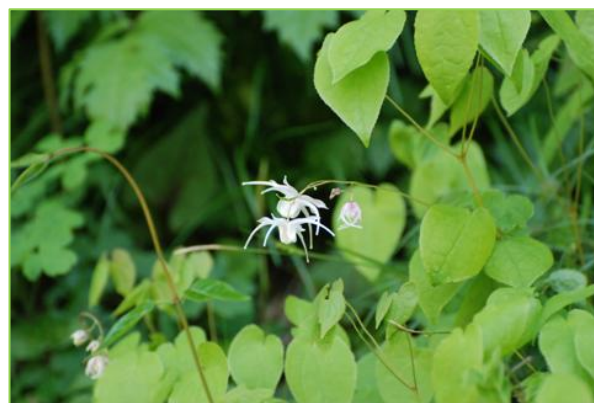
私は里山を見直そうと思っています。現代文明社会の中で、里山を復活させることが求められているのです。ローカルな、身の回りの里山を復活させることが私たちに与えられたテーマです。

千葉では平成 15 年に制定した里山条例に基づく里山活動協定の認定数が、今年度中に 100 件の大台に達する見込みです。

さらに、里山・里海について、地域住民の間で、いろいろな話し合いがもたれるようになっていきます。

昔とは違う視点で、生きた里山を復活させる、価値あるものに再生させる時期を迎えているのです。

これがローカルで実践できたとき、COP10 で、世界に対して説得力のある訴えができるのだと思います。



イカリソウ



キンラン



クマガイソウ